

「錦」についての日中比較

陳瑜霞

東吳大学助手

【中文摘要】本文是由天紙風筆畫雲鶴，山機霜杼織葉錦（懷風藻，大津皇子，七言述志一首）中的「葉錦」一詞彙，未能於『中文大辭典』『佩文韻府』『文史辭源』『大漢和辭典』尋得；却意外於『日本國語大辭典』『廣漢和辭典』的日本漢詩文例句中，發現其意竟為「紅葉」，並非我們意識中“葉紋織成之錦”或“美麗樹葉”的意思，而展開調查。更發現日本的「錦」字本身就不同於中國“錦”字具有「紅葉」的意思。故做了一連串的中日「錦」字的比較。比較是分漢詩文及和歌兩方面進行。比較的結果：漢詩文中的「錦」字，中日用法大致相同，唯用於描寫植物上有所差異。中國會用“錦”形容各種漂亮的植物，如“錦楓”、“錦樹”、“錦苔”等；而日本却不用。再者中國中“花成錦”的現象都是清一色指春花美如錦的意境而日本却是秋摧黃葉紅成錦的意境。為什麼日本對「錦」字會產生「秋意」「紅葉」的概念呢？可從日本和歌中得到印證。因為於和歌中，早在日本最早的萬葉集時代，已有類似秋色成錦的用法「^{ハルハモエナツハミドリニクレナキノニシキニミユルアキノヤマカ}春者毛要夏者綠円紅之綵色爾所見秋山可聞」（万 1281・國歌大觀），而在萬葉集後的古今和歌集、新古今集等二十一代集中，秋天落葉山楓變紅的「錦」字用法，已根深蒂固古日本人的心目中。正如俳諧歲時記（秋，新潮社編）的解說者村山古郷先生，述論紅葉季語時，『昔は紅葉のさま「錦」とか「錦を織」とかいわれたが、今では月並陳腐の形容としてあまり用いられない』寫了以上這段話。所以「錦」字為紅葉的用法可說是日本自古以來

獨特的方式。故日本漢詩人寫下「洞中清淺瑠璃水，庭上蕭條錦繡林」(66)、
「金波映水月孤月，錦葉移紅秋忽秋」(本文 P.3.e 例)、「初以錦葉之殘林 為詩題
，後見金菊之臨水凝思」(本文 P.3.f 例)就不足為奇了。

中日文中有許多類似「錦」字般，有不同用法的漢字，這值得對中日比較有興趣者去探討開發。

【關鍵字】日中比較・錦・葉錦・錦葉

1.

a. 「天紙風筆畫雲鶴」

山機霜杼織葉錦」(大津皇子・七言述志一首) (①)

これは『懷風藻』に載られておる漢詩である。天紙に山機、風筆に霜杼、畫に織、立派な対句関係が見られる。が、末句の“雲鶴”に対して“葉錦”という語彙が用いられていることにおける異議を唱える中国人はいないとは言えないのであろう。何故ならば、“雲鶴”は『大漢和辞典』(②)で、「雲の中を飛ぶ鶴」という意味をとっているが、

b. “長閑羨雲鶴

久別愧烟蘿”(白居易「晚秋有懷鄭中舊隱詩」) (『大漢和辞典』)

c. “天外鴛鴦愁不見

山中雲鶴喜相見”(盧肇「將歸宜春留題新安館」) (『大漢和辞典』)

又、b. c. の例により、雲鶴に烟蘿、鴛鴦とのような対句関係は自然界にある専門語彙との対応される関係だと分る。問題になるのは中国語の語感で、葉の紋で織った錦に当る「葉錦」は「雲鶴」の対語として取扱われていることが適当であろうかとのことである。この問題を暫らくそのままにしておいて、先にこの a. 漢詩における注釈を見ておきたい。注釈は次のようである。

「天のごとく広い紙の上に風のごとく自由に筆を飛ばして雲間にかける鶴をえ

がき（天、風、雲は縁語）、また山が物を織るはたとなり、霜が杼（横糸を巻きつける道具）となって紅葉という錦の織物を織る（機、杼、錦、織は縁語）即ち山に置く霜が木の葉を紅葉させる。このように自由にしかもあやのある立派な詩文を作りたいものの意」（③）

以上の注によると、「葉錦」を「紅葉」に意味することが分る。「紅葉」は『大漢和辞典』で「木の葉の秋に赤く変色すること、又もみぢ」と解かれている。「葉錦」は「紅葉」であるならば、“雲鶴”との対応関係も明らかに理解できる。

同じ“葉錦”の用例も次のように見られる。

d. 「葉錦之照水浮時、採鴛添綵…」

注：「紅葉が水の面を照らして浮ぶ秋の時期には美しいおし鳥が更に美しさを添える」（④）

しかし、「葉錦」は『大漢和辞典』、『廣漢和辭典』（⑤）『中文大辭典』（⑥）、『佩文韻府』（⑦）、『日本国語大辞典』（⑧）で、用例を一つも見いだし得ないが、倒装される「錦葉」は『廣漢和辭典』、『日本国語大辞典』で見いだすことができる。

e. 「金波映水月孤月。錦葉移紅秋忽秋」

（本朝無題詩・見畫障獨吟（藤原周光）（日本国語大辞典より）

f. 「初以錦葉之殘林為詩題、後見金菊之臨水凝歌思

（本朝續文粹、秋夜同詠黃菊臨水應教和歌序・藤原明衡）（廣漢和辭典より）

“錦葉”は皆「美しい紅葉」（廣漢和辭典）と注釈される。これはちょうど“葉錦”と同じ意味でとれているようであるから、「錦葉」と「葉錦」を同一語彙に認めればよろしかろう。

「錦葉」にしろ、「葉錦」にしろ、以上の依据された用例及び出典はすべて日本の漢詩文であり、中国の『中文大辭典』、『佩文韻府』、『文史辭源』（⑧）などの資料に全然載っていないということについて、「葉錦」或は「錦葉」は中国語に定着していない、つまり中国語ではないことだと言えよう。そして、紅葉

を「葉錦」か「錦葉」にたとえている使い方は中国風の使い方ではないことだとも言えよう。

中国語でないさえ、使われていること、特に母国語でない日本の漢詩文学者たちに引用されていることは、日本の漢詩文学者の「和習」の結果、つまり日本自分で作った独特な語彙ではないかと思われる。いったい日本人はどういうわけでこの語彙を作ったのかについてとても興味深いので、少し調査して述べたのである。

2.

「葉」は別に問題にならないが、「錦」は『中文大辭典』では「①裏色織文也（後略）②凡稱鮮明美麗曰錦③姓也」、『日本国語大辞典』では「①数種の色系で地組織と文様を織り出した織物②美しくうるわしいものをたどていう語③秋の紅葉をたどていう語」書いてあるように、中日語意味を異にすることが分かる。

「紅葉…（前略）…者は紅葉のさまを「錦」とか「錦を織る」とかいわれたが、今では月並陳腐の形容としてあまり用いられない」（⑨）とも書いておられるので、「葉錦」或は「錦葉」という造語を理解しようとする限り、「錦」の使い方を理解すべきだと思われる。そのわけで、「錦」を調査してみたのである。調査方法としては漢詩文及び和歌における「錦」を取り出して比較してみたのである。調査文献は次のようである。

A. 漢詩文類

1. 懷風藻（同①）
2. 文華秀麗集（⑩）
3. 本朝文粹（⑪）
4. 菅家文章・菅家後集（⑫）

5. 和漢朗詠集 (13)
6. 国譯唐詩選 (14)
7. 国譯三體詩 (15)
8. 李白 (漢詩大系 8)
9. 白樂天 (漢詩大系 12)
10. 李白歌詩索引 (哈佛大学編)
11. 唐詩三百首 (16)
12. 唐宋词選 (17)

B. 和歌類

1. 萬葉集 (18)
2. 古今和歌集 (19)
3. 古今六帖 (国歌大観)
4. 二十一代集 (国歌大観)
5. 百人一首 (20)

3.

3.1 漢詩文における「錦」の用例調査

☐ 織物類

- 「錦褥玳筵親惠密。南鸛東鰈還是輕。」 (日 21)
- 「嫌褰錦帳長薰麝。惡卷珠簾晚著釵。」 (日 22)
- “烏孫腰間佩兩刀。刃可吹毛錦為帶。” (中 23)
- “八尺龍鬚方錦褥。已涼天氣未寒時。” (中 24)
- “美人贈我錦綉段。何以報之青玉案。” (中 25)
- “手持錦袍覆我身。我醉橫眠枕其股。” (中 26)

上の例のように、「錦」+布地類は明らかに織物をさすことが分る。その他に、

布地類、布産地名詞、顔色、形容詞＋「錦」も各種類の錦になる。

○「櫪一名羅亦有華者俗謂之羅錦羅錦猶言杉錦棟綾也羅錦明杉錦暗。」（中②⑦）

○「童子之節也緇布衣錦綠錦紳并紐錦束髮皆朱錦也。」（中②⑧）

○「恰似湘妃臨岸泣。欺誣蜀錦帶波浮。」（日②⑨）

「錦」における織物類という使い方は日中とも同じことだと見られる。

㊦ 書物類

○「晚來嬾織中錦。愁向高樓明月孤。」（日③⑩）

○「未度征人意。空勞錦字廻。」（日③⑪）

○「織錦機中。已弁相思之字。」（日③⑫）

○「鴈落碧落書青紙。隼擊霜林破錦機。」（日③⑬）

○「少無螢雪志。長無錦綺工。」（日③⑭）

○「願織廻文錦。因君寄武威。」（中③⑮）

○「機中錦字論長恨。樓上花枝笑獨眠。」（中③⑯）

以上のように書物類をさす使い方は「晉書、列女伝に、竇滔の妻蘇氏が滔が流沙にうつされて後、これを思い、錦を織り廻文旋図の詩をつくって夫に送ったという」（③⑰）という伝説により引用されるのである。これも日中の一致している使い方だと認められる。

㊦ 豊かな生活をたとえる出世類

○「孤立如逢衣錦客。四分疑伴散花僧。」（日③⑱）

○「越王勾踐破吳歸。義士還家盡錦衣。」（中③⑲）

○「錦衣孤裘。諸侯之服。」（中④⑩）

以上のような使い方も日中一致的だと思われる。

㊦ うるわしい物を象徴する美称類

イ・動物の美称

○「登望繡翼徑。降臨錦鱗淵。」（日④⑪）

○「秋浦錦駝鳥。」（中④⑫）

- “暖戲煙蕪錦翼齊、品流應得近山鷄。”（中43）

ロ・山川地石物の美称

- 「錦巖飛瀑激。春岫曄桃開。」（日44）
 ○ 「於是錦圖瓊牒。所載多岐。」（日45）
 ○ “錦瑟無端五十弦。一絃一柱思華年。”（中46）
 ○ “玉璽不緣歸日角。錦帆應是到天涯。”（中47）
 ○ “錦箴裁冠添散逸。玉芽修饌稱清虛。”（中48）
 ○ “紅泥亭子赤欄干。碧流環轉青錦湍。”（中49）
 ○ “紫翠円房。錦雲日燭。朱霞九光。”（中50）
 ○ “蚌蛤被濱涯。光彩如錦虹。”（中51）
 ○ “玉階紫闥。雕柱錦牆。”（中52）
 ○ “錦纜翻灑。銀檣照爛。”（中53）

ハ・植物の美称

- “水搖文鷁動。纜轉錦花繁。”（中54）
 ○ “巫山猶錦樹。南國且黃鸝。”（中55）
 ○ “丘隴圍円竹。祠堂列錦楓。”（中56）
 ○ “緑字錦苔生。”（中57）

以上のように、イ・とロ・との使い方は日中の一致性が分る。問題になったハ・、つまり、植物の美称をさす使い方は調査された日本漢詩文である資料で一例も検出されないほかに、『大漢和辞典』、『廣漢和辭典』、『日本国語大辞典』でも見いだされない。これはたぶん次に言っておきたい類型意識が高すぎて、植物を形容するならば、すぐこういうパターンになってしまうのではないかと思われる。このパターンというと、

五 花が綺麗に咲いている風景類

- “咸陽三月時。千花晝如錦。”（中58）
 ○ “桐落秋蛙散。桃舒春錦芳。”（中59）

- “垂絲被柳陌。落錦覆桃蹊。”（中⑥⑩）
- “野草芳菲紅錦地。遊絲繚亂碧羅。”（中⑥⑪）
- 「山桃復野桃。日曝紅錦之幅。」（日⑥⑫）
- 「眼貧蜀郡裁殘錦。耳倦秦城調盡箏。」（日⑥⑬）
- 「天霽雲衣落。池明桃錦舒。」（日⑥⑭）
- 「仙蓋追來花錦亂。御簾卷却月鉤新。」（日⑥⑮）

以上のように花風景を象徴する使い方は日中で一致性が見られる。即ちこれは花における春の風景を象徴することである。例えば、⑥⑩の題は「春興」であり、⑥⑬の資料にある注釈によると「文集『村の東なる古き塚に登る』詩に「花少鶯亦稀、年年春閨老」とある句を題とする」が分り、⑥⑮の題は「三月三日…」であるから、明らかに春の花が咲いている風景をさすことが分る。残った用例が理解されやすいので、原因の述べりを省略しておきたい。

ここまで述べてきて、「錦」についての日中両語の観念は大抵一致していると認められよう。しかし、次の用例を見よう。

- 「洞中清淺瑠璃水。庭上蕭條錦鏤林。」（日⑥⑯）
- 「鴈飛碧落書青紙。隼擊霜林破錦機。」（日⑥⑰）
- 「遂使輕紅滅。何教碎錦縫。」（日⑥⑱）

⑥⑯注釈によると「水辺の庭さきは秋のけはいももの寂しくもみじした秋の林が錦鏤の如くずまりはえる。」

⑥⑰注釈によると「隼が霜をかぶってまっかに紅葉した林の葉を散らして小鳥をさっとねらって撃ちとる一錦鏤の機の織物を破るかっこうだ」

⑥⑱注釈によると「碎錦は散りみだれた紅葉の形容」とのように紅葉の風景を象徴することが分る。前にも述べてあるが、このような使い方は日本の独特な使い方だと認定できるかどうか。まず、日本人の心という和歌を調査しておきたい。つまり、もし和歌にもよく使われているならば、和風的なものだと認定すればよからう。

3.2 和歌における「錦」の用例調査

㊟織物類

○履^{クツヲ}乎^{ダニ}谷^ハ不^{カデユ}著^{ケドモ}雖^{ニシキ}行^{アヤノ} 錦^{ナカニ} 綾^{ニツツ}之^{メル}中^イ円^{ハヒユ}裏^モ有^{ニシガ}齊^メ兒^ヤ毛^ヲ妹^ヲ尔^ヲ将^ヲ及^ヲ哉^ヲ。(万⁶⁹)

○小車のまひてにほひのたふさすはに^にし^しき^きの^のひ^ひも^もをとかんとぞ思ふ。(古今六⁷⁰)

上の例のように、和、漢の一致性が見られる。

㊟書物類

○忽に芳音を辱くし、……俗の語に云へらく、藤^{フジ}以^{ヨリ}ち^チて錦^{キン}に^ニ續^ツぐといへり。い
ささか談^ナ咲^{ザキ}に^ニ擬^ニふらくのみ。(万¹¹)

「俗語云以^{ヨリ}藤^{フジ}續^ツ錦^{キン}。聊^{シカ}擬^ニ咲^{ザキ}耳^ニ。」(万¹²)

○「兼垂倭詩。詞^シ林^{リン}舒^{シュ}錦^{キン}。」(万¹³)

以上のような漢風の用法は万葉以後、二十一代集で用例を一つも見いだしえない。

㊟植物の自然な風景類

(1)春の柳桜などの風景

○鶯^{ウグハス}の来^キ鳴^ナく春^ハべ^ハ巖^{シハ}には山下光り錦^{キン}な^ナす花^{ハナ}咲^{サキ}きををり…(万¹⁴)

○みわたせばや^やな^なぎ^ぎさ^さく^くら^らをこきまぜてみやこぞは^はる^るの^のに^にし^しき^きなりける(和¹⁵)

○色々のに^にし^しき^きとみゆる花^{ハナ}桜^{オウ}春^{ハル}のかすみやたちかさぬらん(玉¹⁶)

○春^{ハル}くればさ^さく^くら^らこきまぜ青^{アヲ}柳^{ヤナギ}のかづらき山^{ヤマ}ぞに^にし^しき^きなりける。(統拾遺¹⁷)

以上の用例を漢詩に私訳すれば、

⑭鶯來鳴春、巖麓明來花成錦。

⑮柳櫻齊放春如錦。

⑯花櫻春霞彩成錦。

⑰春織柳櫻山如錦。

ほとんど前の⑤との用法が一致していることが見られる。

(2)秋の紅葉の風景

○春者毛要夏者緑田紅之綵色尔所見秋山可聞(万^{ハルハモエナツハミドリニクレナキノニシキニミユルアキノヤマカモ}79)

○秋のタベ竜田河に流るゝ紅葉をば帝の御目には錦と見たまひ、…(古^コ80)

○たがための錦なればか秋ぎりの佐保の山べをたちかくすらむ(古^コ81)

○竜田河もみぢ乱れてながるめりわたらば錦中やたえなむ(古^コ82)

○霜のたて露のぬきこそよわからし山の錦の織ればかつちる(古^コ83)

○しもたてつゆのぬこそもろからし山のにしきのおればかつちる(古今六)

○雲かかるこずゑいろづくはつせ山時雨や秋のにしきおるらし(続後^{ゾクゴ}85)

○おとはやまもみぢちるらしかふさかのせきのをがはににしきおりかく(金^キ86)

○大月河うかぶ紅葉のにしきをば浪の心にまかせてたつ(新勅^{シンチク}87)

○秋の色にそむる紅葉やたてもなくぬきも定めぬにしきなるらん(新千^{シンセン}88)

○夕霧もたつ宮城野の秋萩は木のしたやみの錦なりけり(新続^{シンゾク}89)

○萩原千草の糸をくるす野に口をへておるや錦なるらん(新続^{シンゾク}90)

○このたびは幣もとりあへずたむけ山もみぢの錦神のまにまに(古^コ91)

上の例ねように、万葉集時代から、秋における落葉、紅葉という風景がもう和歌の世界で「錦」に定着されているように考えられよう。こういうわけで、漢詩文の世界で、「錦」を紅葉のたとえとする使い方も免れないことだと理解できる。

最後、問題点としての「葉錦」か「錦葉」について述べておきたい。

○もみぢばのながる秋は河ごとに錦あらふと人やみるらむ。(後撰^{ゴゼン}92)

○から衣たつたの山のもみぢばははた物もなき錦なりけり。(後撰^{ゴゼン}92)

○もみぢばはにしきと見ゆとききしかどめもあやにこそけふはちりぬれ(後拾^{ゴシホ}93)

○紅葉ばのうつろの波の竜田河おられぬ水の錦とや見む(新千^{シンセン}94)

○庭のおもにちりてつもれる紅葉ばは九重にしく錦なりけり(千^{セン}95)

以上の用例における「もみぢば」或いは「紅葉ば」を見ておきたい。これは明らかに「もみぢ葉」或は「紅葉葉」である。もみぢばも紅葉を意味していることが解かれる。前にも述べてあるが、錦はもみぢであるならば、「もみぢ葉」を

「錦葉」に書けばよかろう。他に、以上の用例で「…もみぢ葉…錦…」も見えるが、これを漢文で私訳すれば、“紅葉葉如錦”となる。「葉如錦」を略すれば、「葉錦」になっているのではないか。「錦葉」にしる、「葉錦」にしる、皆日本の独特な漢語であり、さらに和歌からの受容だと言ってよかろう。

4.

以上は日中両国で「錦」についての用法を比較して述べたものである。日本人の漢詩文の中に和風のような表現がなされることはもともと当然なことだと分っているが、いったいどのぐらい「和習」されるか、これを知りたいのである。こんな微妙な差が分れば、日中両国の文学上、文化上、民族性などに対してもっと理解しやすくなるのではないかと思う。例えば、この「錦」はもともと「綺麗な、鮮明な、美しい」という意味をもっている。中国人においては春は興、秋は愁という情緒を持っているので、「春」を錦と描くが、「秋」を錦と描かないのだと考えられる。しかし、日本人においては「…二条良基は『筑波問答』に、「…昨日と思へば今日に過ぎ、春と思へば秋になり、花と思へば紅葉に移ろふさまなどは、飛花落葉の観念もなからんや」と、連歌の形式が自然と人生の無常転変をそのままあらわしていることを説いた」(96)「不幸のあきらめとつながっている自然描写は、やはり日本に独特な心理の伝統に由来するものといえる」(同上 p. 71)と言わたとおり、日本人はこういう無常感を一つの「あわれ」の美とみとめるので、秋に対する淡々たる哀愁をイメージしている落葉、紅葉を自然に美しい「錦」にたとえとして使ったのだとも考えられる。これはほぼ「恋の至極は忍ぶ恋」という話と同じぐらいの「あわれ」美ではないかと思う。

参考文献及び補注

- 1) 懷風藻（日本古典文學大系・小島憲之校注・岩波書局）P.76、6番詩・七言述志一首・大津皇子作。
- 2) 大漢和辭典（大修館書店・諸橋轍次著作）。
- 3) 同①・小島憲之校注・懷風藻6。
- 4) 本朝文粹（日本古典文學大系・小島憲之校注・岩波書局）に出典。P.330、奉同源澄才子河原院賦・源順作・小島憲之校注。
- 5) 廣漢和辭典（大修館書店・諸橋轍次・鎌田正・米山寅大郎著）。
- 6) 中文大辭典（中國文化學院出版部・中文大辭典編纂委員會編・張其昀監修・林尹・高明主編。M 57、4）。
- 7) 佩文韻府。
- 8) 文史辭源（天成出版社）。
- 9) 俳諧歳時記・秋（新潮文庫・新潮社編・村山古郷解説 S.43、2、P.182）。
- 10) 文華秀麗集同①（日本古典文學大系・小島憲之校注）。
- 11) 本朝文粹同の（日本古典文學大系・小島憲之校注）。
- 12) 菅家文草・菅家後集（日本古典文學大系・川口久雄注・岩波書店）。
- 13) 和漢朗詠集（日本古典文學大系・川口久雄・志田延義注・岩波書店）。
- 14) 國譯唐詩選（國譯漢文大成・明李于鱗原著・日本釋清潭譯並講・國民文庫刊行會）。
- 15) 國譯三體詩（國譯漢文大成・宋周弼伯弼著・日本釋清潭譯並講）。
- 16) 唐詩三百首（蘅塘退士輯・大坤書局）。
- 17) 唐宋詞選（譚尉編注・大夏出版社）。
- 18) 萬葉集（國歌大觀）と（岩波文庫・佐佐木信綱編）及び（日本古典文學大系）三種類。

- 19) 古今和歌集（岩波文庫・佐伯梅支校注）。
- 20) 百人一首（岩波文庫・池田弥三郎著注）。
- 21) 文華秀麗集に出典。P.241、52 番・「奉和春閨怨」一首。朝鹿取作。小島憲之校注。錦褥一錦のしとね（ふとん）。
- 22) 和漢朗詠に出典。「佳人難出」。田達音作。
- 23) 國譯唐詩選に出典。題「崔五丈圖屏風賦得烏孫佩刀」李頎作。卷二、P.158、注：錦欄を以て製す。
- 24) 唐詩三百首に出典。「已涼」。韓偓。
- 25) 四愁詩「四思日」張衡作。
- 26) 漢詩大系 8 に出典。「憶舊遊寄誰郡元參軍」李白作。
- 27) 佩文韻府より。埤雅に出典。
- 28) 佩文韻府より。禮記に出典。
- 29) 菅家文章に出典・卷第四、P.335、〔亞水花〕、川口久雄注・蜀錦一蜀江の錦。
- 30) 文華秀麗集に出典。55 番詩。P.244。題「奉和春閨怨一首、巨勢識人作。小島憲之注。
- 31) 文華秀麗集に出典。68 番詩。P.255。題「春和梅花落一首。菅原清公作。
- 32) 和漢朗詠に出典。241 番詩。P.108。題「十五夜」公乘億。
- 33) 和漢朗詠に出典。321 番詩。P.129。題「鴈」。田達音。
- 34) 懷風藻に出典。題「五言述懷一首」、從三位中納言円瑋真人廣成作。
- 35) 梁元帝の「寒霄三韻」より。
- 36) 唐詩三百首に出典。皇甫冉の「春思」より。
- 37) 和漢朗詠の注より。注者は川口久雄・志田延義である。
- 38) 菅家後集に出典。475 番詩。P.476。題「冬日感庭前紅葉示秀才淳茂」菅原道真作。
- 39) 國譯三體詩に出典。P.680。「越中懷古」李白作。
- 40) 大漢和辭典により、禮記の玉藻篇。

- 41) 懷風藻に出典。20 番詩。P.90。「五言春日應詔」二首。大宰大貳從四位上巨勢朝臣多益須作。
- 42) 李白歌詩索引より。
- 43) 國譯三體詩に出典。P.447。「鸛鵒」鄭谷作。
- 44) 懷風藻に出典。54 番詩。P.120。「五言三月三日曲水宴」一首、大學頭從五位下山田史三方作。
- 45) 本朝文粹に出典。P.368。「奉同源澄才子河原」、從五位上行文章博士橘朝臣直幹問辨山水。
- 46) 國譯三體詩に出典。P.279。「琴瑟」李商隱作。
- 47) 同上より。P.291。「隋宮」李商隱作。
- 48) 同上より。P.440。「洗竹」王貞白作。
- 49) 漢詩大系 8 より。「魯郡堯祠送竇明府薄華還西京」李白作。
- 50) 大漢和辭典より。「水經注」に出典。
- 51) 同上より。曹植の「盤石篇」。
- 52) 同上より。梁元帝の「玄覽賦」。
- 53) 同上より。王勃の「采蓮賦」。
- 54) 同上より。唐太宗の「賦得浮橋詩」。
- 55) 同上より。杜甫の「復愁詩」。
- 56) 同上より。馬汝驥の「過玄明宮故地有傷往事詩」。
- 57) 李白歌詩索引。
- 58) 佩文韻府より。李白詩。
- 59) 同上より。盧思道詩。
- 60) 和漢朗詠に出典。19 番詩。P.51。「春興」劉禹錫作。
- 61) 同上出典。21 番詩。P.51。「春興」菅原道真作。
- 62) 同上出典。122 番詩。P.78。「花」。源相規作。
- 63) 佩文韻府より。蘇味道詩。

- 64) 懷風藻に出典。94 番詩。P.156。「五言暮春於弟園池置酒一首」從三位兵部卿兼左右京大夫藤原朝臣萬里作。
- 65) 菅家文集に出典。324 番詩。P.358。「三月三日、侍於雅院。賜侍臣曲水之飲。應製。卷四。」
- 66) 和漢朗詠に出典。303 番詩。P.124。保胤。
- 67) 同上出典。321 番詩。P.129。田達音。
- 68) 菅家文集に出典。373 番詩。P.401 卷五。「賦葉落庭柯空」。
- 69) 万葉集 1811。國歌大觀。
- 70) 古今六帖 1422。國歌大觀。「ひろかはの女わう牛」。
- 71) 万葉集 3966 (岩波書店・二月二十九日、大伴宿禰家持)。
- 72) 万葉集 3966 (日本古典文學大系。二月二十九日の大伴宿禰家持のなり)。
- 73) 同上。
- 74) 万葉集 1053 (岩波書店)「夕邇の新京を讃むる歌二首并に短歌。」
- 75) 和漢朗詠 630 (國歌大觀) 素性。
- 76) 玉葉集 143 (國歌大觀) 定頼・題不知。
- 77) 続拾遺集 73 (國歌大觀) 家隆・題しらず。
- 78) 古今和歌集 420 (岩波書店) 卷九羈旅歌、すがはちの朝臣作。
- 79) 万葉集 2181 (國歌大觀・詠山)。
- 80) 古今和歌集 (仮名序より) (岩波書店)。
- 81) 同上卷五秋歌下、きのとものり作、265 番。
- 82) 同上卷五秋歌下、題しらず、よみ人しらず、283 番。
- 83) 同上卷五秋歌下、題「又は飛鳥川もみちばながる」せきお作。
- 84) 古今六帖 3775、(國歌大觀)。
- 85) 続後撰 419 (國歌大觀)。
- 86) 金葉集 246 (國歌大觀)「紅葉の心をよめる」源俊頼作。
- 87) 新勅選集 370 (國歌大觀) 題しらず、九条大政。

- 88) 新千載集 557、國歌大觀、百首御製。
- 89) 新続古集 395、國歌大觀「草花」、家尹作。
- 90) 同上 396、國歌大觀、雅縁作。
- 91) 後撰集 415、國歌大觀、よみしらず。
- 92) 同上 386、國歌大觀、つらゆき作。
- 93) 後拾遺 1206、國歌大觀、堀川右大臣。
- 94) 新千載集 561、國歌大觀、太政大臣。
- 95) 千載集 369、國歌大觀藤原公重。
- 96) 日本人の心理・南博著・岩波新書「日本人の不幸感」より P.69。